

京都大学附置研究所・センター「品川セミナー」第2回が開催されました。

京都大学には、学部や大学院のほかに、たくさんの附置研究所と研究センターがあります。2010年4月には新たにiPS研究所が設立され、全部で22の研究所群となりました。この研究所群が一体となって、毎月1回、第1金曜日の夕方に、京都大学東京オフィス（JR品川駅前のインターシティ品川27階）で、連続セミナーを開催しています。

その第2回目として、東南アジア研究所長の清水展が「グローバル化って何だろうーフィリピン山奥の世界遺産の棚田村から見たらー」と題して報告しました。参加者は80人を超え、DVD映像や写真を使って1時間あまりお話しした後、熱心な質疑応答が1時間ほど続きました。



セミナーの様子。

夕暮れ時のハパオ村。ギターと携帯を持つ少年。

報告の概要は、おおよそ以下のとおりです。1998年から清水が毎年の休みに短期の調査を続けているハパオ村は、ルソン島北部山岳地帯イフガオ州の山奥にあります。かつてアジア太平洋戦争の末期に、山下奉文将軍が率いる日本軍の主力部隊の数万の兵が最後に立てこもった地域の中心でした。1970年代の終盤から1980年代の後半にかけては、共産党＝新人民軍ゲリラが軍事拠点としました。

1995年には村の棚田がユネスコの世界遺産として登録されました。さらには、過去20年ほどのあいだに、330世帯1,700人の小さな村から150人以上が海外出稼ぎに出ています。その2/3は女性で、行き先は香港、シンガポール、台湾、中東、ヨーロッパなどの27カ国におよびます。

そのような歴史と現状をふまえて、村の長老のロペス・ナウヤック氏は、ハパオ村の人々は今までグローバルに生きてきたし、これからもそう生きてゆくべきなのだと主張し、「イフガオ・グローバル・フォーレスト・シティ・ムーブメント（イフガオ森林都市運動）」という名のNPOを1997年に設立しました。その目的は植林と環境保全、そして社会発展のための各種活動を進めることです。2000年からは、兵庫県にある小さなNGOをパートナーとして、日本のJICAや民間の4つの援助団体から、総計8,000万円以上の助成金を得ました。

ハパオ村の人々は、われわれ日本人以上に、グローバル化の波に直接に巻き込まれてきた、とすることができます。ハパオ村の事例をとおして、草の根レベルで／から見たグローバリゼーションについて考えました。